

リヤカーを曳ひいて

水上 勉

出典 『戦後短篇小説再発見』⑧ 歴史の証言』所収

講談社文芸文庫編／講談社文芸文庫

400字詰原稿用紙20枚

毎年八月十五日がくると、かならず思い出すことがあって、そのことをあまり人に話さなかった。が、最近、ある新聞から「風景論」という小文を依頼されて、そのことについて少し書いた。しかし、少し書いたぐらいでは、永年かくしていたことを、それでしゃべったことにはならない気もするので、この機会にそのことを書いておく。前書きめいて恐縮だが、なぜ、こんなことにこだわるかという、八月十五日——すなわち、私たち戦中派の庶民にとって、この日は辛かった大戦争がようやく終わった日であって、それまで、夜は灯もつけず、警報が鳴れば、ゲートルまいて火たたきをもつて防空壕ぼんくうごうへ入る、といった、つまり夜もろくに眠れない日がつづいていた上に、大本営の報道では嘘をつかれていても、うすうす敗まけ戦いくさの様相はわかつていて、この上はもう一億総決起、まかりまちがえば、老若婦女子までが、アメリカ兵と刺しちがえて死なねばならない、というような、暗い気持ちだったのである。頭の上に鉄板をかぶったような、息苦しくて、希望のない、お先まつ暗くだった暑い日に、とつぜん天皇が詔勅かんぼつを渙はつ発はつされただけの事で、つまりこの日の正午のラジオ放送を期として、終戦がきたのだった。

「日本のいちばん長い日」とよんで、この日の朝から晩までのことを映画にした人がいたが、庶民にとって、この日は、そんなに長かったかどうか。とにかく、それぞれの思い出はあり、誰もが、話せばながい短かいの差はあっても一篇の掌篇ぺんぐらいになりそうな経験はもちあわせていようと思う。「いちばん長い日」などではなくて、「とても短かかった日」だと思ふ人もいようし、「とても嬉しかった日」と思ふ人もいようし、反対に、「とても悲しかった日」と思ふ人もいよう。当時、日本内外地で、何千万の人がこの終戦を迎えたか詳つまびらかではないが、おそらく何千万の人が、何千万の思い出を今日も胸に抱いていることと思う。さて、そのように、「八月十五日」は日本人にとって忘れがたい。ところが、私だけは、その日についての思い出をあまり人にいわなかった。なぜか。

朝眼をさましたのは、六時半ごろだったと思う。村落から一里ほど山道を歩いて、本郷ほんじょうという駅までゆき、そこから、勤め先の学校まで汽車にのる習慣だったから、汽車は七時半発なので、その頃に起きていなければ間にあわない。とにかく、炉端でめしを喰っていると、外から声がして、

「ツトムよ。わしと一しよに小浜おぼまへゆけや。山岸さんがチブスになったでエ」

と父が入ってくる。この父は当時五十八歳。大工仕事で張り切っていたから、まだ元気だった。胸をはって上りはなを上つてくると、

「役場へいったら、チブスは法定伝染病やさかい、小浜の隔離病院へつれてゆかないかんいうた。しかたない。リヤカーにもつんでゆかにや。汽車にはのせてくれん」

情なさそうにいうのだった。私はめしが咽喉のどへつまつた。山岸というのは、東京からこの年の四月に疎開してきた友人で、私は、この友人の細君と男女ふたりの子を村であずかっていた。

あずかつていたときこえはよいが、山岸が若狭へ疎開したいといつてきたので、村の農家を借りてやっただけのことなのだが、この友人は、疎開して三日目に召集令がきて、横須賀の海兵団に入ったが、出発時に、あとのことをよろしく頼むといつて出たので、私は、細君と子二人を、とにかく、村に住まわせて、援護してやらねばならない立場だった。しかし、その援護も、思うように出来なかつた。私は隣郡の小学校の助教こそしているが、月給は闇米三升も買えない額だったし、朝七時半に駅へ出て、勤労奉仕でつかれて帰つてくると、すぐ寝たので、歩いて五分ほどの、父の知り合いの農家に間借りさせている山岸一家のことについては、気になりながらも、顔さえみない日が多かつた。その細君が、チフスに罹かかつたときいて、自分ごとのようにうろたえた。というのは、父のいうとおり、伝染病であるから、隔離しなければならぬが、頭にきたのは、この細君が、江戸っ子でしゃきしゃきしているところへむけて、子供二人が、何やかや、食糧のことやあそび場のことなどで、農家の未亡人とウマがあわず、日頃から口もきかない間柄になつてしまつていたことである。もつとも、このような、疎開者と農家との悶着もんぢやくは、日本国じゆうで起きていたろうが、とにかく、山岸一家は、疎開してきて三日目に当主を召集令でとられ、何かと予定が狂つた上に、東京で焼け出されているために、無けなしの衣類、時計、鍋釜なべかま、書籍などをもつてきたものの、それらを食べきかりの子らのために米に換えねばならない事情にあつて、細君は、またヒステリー症だったから、しよつちゆう、村の悪口をいうようになっていた。つまり、私という人間が、つとめ先も遠かつたために、力のある相談相手になれなかつたせいもあつて、村へ疎開してきたことを後悔し、それを口にもしよつちゆう出したのは、夫を兵隊にとられた憎悪もあつたろう。とにかく、八月へ入つた頃は、農家自体にもかくし米はなくなつていて、麦に大根葉、蒔ひき、芋など入れた雑炊で喰いしのごありさまだったから、疎開してきた町人の食事はそれ以上であつた。子供らは川へ入つて、

百姓の子でさえが喰わない泥ガニだとか、川エビをとって、代用食にしていた。父が情なきような顔をしたのは、つまり、私への無言の非難がふくまれている。厄介な一家を村へつれてきたという意味と、川エビや泥ガニを喰ったりするから、チフスになったのだ、という、かすかな町人への憐愍れんびんのこもった軽侮感である。

「しかたない……お前、今日は学校やすめ。小浜の病院までゆこ」

父はそういった。私は、急いで、駅へ向う勤め人の家へ走って、一日の休暇を頼んでもらい（村落には電話はなかった）、腹をきめて、山岸の細君のいる農家へいった。細君は、板の間の筵むしろの上に寝ていた。額には手拭がかけてあつて、わきに子供がすわっていた。農家の人たちはいなかった。あとできくと、医者チフスと断定した前夜から、親戚しんせきの家へ逃げて、いなかった。これももつともなことである。うつれば大変だ。うつっても仕方がないとあきらめておれるのは身内の者だけである。私は、上が五つ、下が四つの子らが、つくねんと坐つて、異郷で恐ろしい病氣になった母を見守っている光景をみて、足が硬こわばつた。

「どうや、どんなあんばいや」

と私はわきに行つて顔をのぞいた。細君は、真つ赧かな顔をして、泣いているのか、わらつているのかわからないような、洗面をつくつて、顔を左右に少しうごかしたが、首に汗がながれている。眼はとろんとして、元気がない。

「小浜の病院へゆこ。わしと父がつれてゆくさかい……安心しな。子供らはうちの母がいるので……とにかく、病院へ行つてゆつくり寝るがええ」

私は、なぐさめようもなくそんなことをいつておいて、すぐ家へもどつて、仕度にかかった。リヤカーの上に板戸をおいて、父とごろごろ曳いて行つた。そしてふたたび、農家の縁から、細君の間借りしている板の間へ入ると、寝たままの細君を、私が頭の方をもち、父は足の方を

もつて、敷ぶとんごとりヤカーにのせた。細君は細身で、やせた体質だった。その上、栄養失調になつていたので、ひどく軽かつた。父は、細君の頭を、リヤカーの把手へのびた二本の鉄棒の下へすわりよくし、地べたにつくくらの長い板の上へ、足をのばさせて寝かせ、その上へ毛布をかぶせた。出発する時に、細君の額に手をあてて、

「四十度はあるな」

といつた。つまり、この時、細君が、ひとことも物をいわなかつたのは、高熱で口がきけなかつたのである。そうして、顔が真っ赭だつたのは、陽焼けの上に、熱のための上気だつたろう。玉の汗は、首すじから、胸へながれ、貧相な胸の隆起のあるあばらへ吸われている。細君は、二十七か八だつたはずだが、ぬれタオルをかぶつた髪がかさかさしていたせいで、ひどく老けてみえた。私らは把手をあげると、板が地についてケリケリと音をたてるのを、なるべく地につかないように、力を入れて出発した。私の母が、細君のつかつていた茶碗、箸、鍋、釜など入れた木箱と、そのほかに炭半俵を足もとにのせたので、荷はかなり重くなつた。私が把手をとり、父が、把手につないだ荒縄を二本纏つた紐を肩にかけてひいた。そうして村落の下口まできた時、母に両手をひかれてはだして立っていた二人の子らにいつた。

「お母ちゃん、すぐ息災になつてもどつてくるでエ」

若狭本郷から小浜まで四里あつた。伝染病患者を収容する病院は、当時、近在の人は避病院とよんでいたが、小浜でも東のはずれの桑畑の中にあつたので、かなり遠かつた。私と父は、山岸の細君とふとんと当座の世帯道具をのせたりヤカーを曳いて、先ず村落から山ぞいに若狭本郷まで出たが、その時刻はもう陽はかなりの高さにあつた。線路に沿うて、尾内、長井、鯉川、加斗、勢、青井山と、村落がつづくのだが、この道は海に面しているので景色はよかつた。よく人はリアス式の若狭海岸というが、たしかに小さな岬や半島が無数に出ていて、汽車は、

この凹凸のはげしい海べりを、岸すれすれに走ったり、トンネルをくぐったりして小浜へ抜けてゆく。げんに、私たちがリヤカーを曳いてゆく時に、何時発かの上りと下りが、私たちを黙殺して通った。私たちは、曳く手をやすめて一服して、地めんをゆるがして通る汽車を見た。汽車の窓には、通勤者と召集者らしい国民服の男がぎっしり乗っていて、「万歳」と書いた国旗を窓にはりつけている者もいた。

尾内、長井は海すれすれの道だった。分教場や、墓場や、埋葬地のある海の道は、砂利が敷かれていますので、時にリヤカーのタイヤがきしんだりした。十時をすぎたところに加斗の駅を通った。そこから美しい松原だった。昔、若狭の殿様が植林したといわれるこの松林は、天の橋立のように、白砂の磯のきわに植えられていて、ひくい下枝が形よくくり石の散在する磯を這っていた。陽が照りつけるので、頭が焼けるように暑かったが、松原へくるとそれが翳かげった。私たちはそこでまた、一服した。山岸の細君は、高熱なので、おそらく、リヤカーにのせられてゆく自分をはつきり意識していなかったろう。それは、一服のたびに父と私が交代でとりかえる冷しタオルの熱きにも出ていたし、とろんとした眼や、かわいたくちびるに出ていた。私たちは不安であった。チフスという病気ははげしい下痢をとまなっているし、また高熱だから、炎天の下を長時間歩いておれば、急変がきて、リヤカーの上で心臓がとまったりはしないか。私も父も、病気には幼稚な知識しかなかったもので、はらはらしていた。とにかく、一分間も早く、町の避病院へはこんでやらねばならない。

父は松原を出るころに、しきりに駅長の悪口をいった。

「馬鹿な奴や。一秒間も争う病人やというてたのんだ……客にうつるいいよった……」

父は駅へたのんで、小浜まで切符を売ってくれ、といつたらしい。すると、役場の証明書を

もつてこい、と駅長はいつたそうさだ。それで、父は役場へいつて、証明書をもらつた。ところが、「チフス患者」と書いてあつたので、駅長は、列車には、召集者が大勢のつてゐるから同乗させることは出来ぬとことわつた。この当時は、ひと駅乗るにも、当該地区町村長の旅行者証明書が必要だつた。父が駅長の悪口をいつたのは、つまり、このような、杓子定規な条令に文句をいつてゐるわけだつた。たしかに、一秒間も争う病人をリヤカーにのせて四里の道を歩くことはつらかつた。陽はだんだん頭上にのぼつてきて、私たちの影は小さくなつた。白砂利の道は半紙のように白く光つて、ゴム靴の底が痛いほど焼けた。おそらく、病人は、地めんからそう間隔のない板戸の上に寝てゐたから、地熱は首すじを火のように焼いたろう。私たちは、松原を出ると、加斗坂を登つた。

小浜へゆくためには、加斗坂と勢坂とよばれる二つの山坂をすぎねばならなかつた。九十九折になつたこの赤土の道は、二つのトンネルの上を通つていて、ある高さまでくると、海へせり出した崖の上になつた。崖の上には子谷があつて、泉から小川が流れ、海へ滝のように水が落ちてゐた。ここは、昔から旅人が一服したところで、背のひくい、鼻の欠けた石地藏が立つてゐた。

そこへくると、私たちはまた一服した。

父は、山岸の細君の額のタオルをとつて、道ばたの湧水へ走つてくると、ゆるくしぼつて、細君の額を拭いてから、四つにたたんで額にのせた。細君は、まだ、熱がひかないとみえて、かわいた口をかすかにうごかすだけで、物を言わなかつた。あいかわらず赧い顔をしており、玉の汗であつた。

「ツトムよ、もうひるや。ここで弁当にしよか」

と父はいつた。私はうんとうなずいた。まだ、もう一つ坂がある。その坂へさしかかる頃は、

腹もへつていよう。湧水のあるこの崖の上は、木蔭こかげでもあつた。そこで弁当は時機を得ている。「もうひるや」

と父がいうので、空をみた。陽は中天にあつて、海と崖とを焼いていた。私たちは、よごれたよだれかけをしてもらつてゐる地蔵のよこへリヤカーをずらせた。そして、細君の頭が重いために、手をはなすと板の前方が地べたにつくりヤカーの把手に、拾つてきた木片でつかい棒をして、細君がなるべく、安息に寝ておれるように工夫して休ませてから、地べたにすわつた。

そうして、母がつくつてくれた沢庵たくあんふた切れしかない麦入りめしの弁当を喰つた。

「今日は何日やつたかいな」

とめしを頬ほばりながら父が訊きいた。

「十五日や」

と私はこたえた。

「ほんなら、わしも、ついでに尻けつをみてもらおかなア。小津さんへいつてまた切つてもらわなどもならんさかい。さつきから痛うてかなわんねや」

と父はいつた。

父は極度の痔疾じしつに悩まされてゐた。私は、父の尻を見たことはないのだから、なんでもナスビのようなものがぶら下つたみたい、大腸の口が外へ出てゐると、父はいつた。「痔じ瘻ろう」というのらしかった。父は大工だったので、重い材木をもつたり、道具箱をかついだりする。そんな時、息に力を入れると、そのナスビのようなものが尻へとび出てくる。父は、いちいち荷をおろして、指につばをつけ、その出物を押しこまないと歩けなかつた。

「出たのか」

と私はきいた。

「うん、リヤカーが重いでなア」

といった。

「坂へくると、頭を出しよる」

私は、父が弁当箱をしまうと、いらだたしそうな顔をしてうしろ向きにしゃがむのを見ていた。出物をひっこめているのがわかった。

しゃがんだ父の向うに、若狭の海が美しい水平線をみせてひろがっていた。崖の裾には、塩をふりかけたように波が打ちよせ、裾の海はふかい紫紺の色だけれど、だんだん淡色にかわつて、沖は錫いろに光っていた。山の背で蟬がしきりに啼き、道のすぐ上まで下枝を這わせた松には風が鳴っていた。

私は、湧水の穴へいつて、顔をつけて水を呑んだ。

「さあ、ゆこか」

と父は、出物がひっこんだために気分がよくなったか、元気な声でいった。

「うん」

と私はリヤカーのところへもどつて把手をとつた。父は繩を手首へまいた。そうしてまた坂を降りていった。降りしなはリヤカーの尻が地めんをすつてケリケリと音をたてる。病人の頭にこたえてはいけなから、私は把手を胸の高さにとどめて、軀を宙にうかせながら、海ぎわの風のふく道を降りていった。

正午をまわつて、そろそろ一時になろうかとする時刻であつた。

私たちの眼には、ひろびろと広がる海と、その海へずり落ちるように迫る右手の山が赤土をむきだしていた。

天皇の詔勅をきかなかつた私は、終戦のことを知らなかつた。

つまり、誰もがラジオに聞き入っているころは、加斗坂の石地蔵のよこで、麦めしを喰いながら、父の痔疾とリヤカーの上の友人の細君の病勢を心配していたのである。そして、眼の前には、美しくひろがつた若狭の海があつただけで、この時刻が、あとで、「歴史的な時間」となることを知らなかつた。「日本のいちばん長い日」とか「歴史的な日」とかいうのは、観念というものであつて、人は「歴史的な日」などを生きるものではない。人は、いつも怨憎愛樂の人事の日々の、具体を生きる。「波瀾万丈はらんばんじょうの人生を生きるなどという表現があるが、そんな人でも、ひよつとしたら、その人生は何枚かの風景写真にすぎないのではないか」と、私はのちの「風景論」に書いた。

(一九七二年一〇月「小説サンデー毎日」)